祭祀を行って来た。

現在は春祭（祈年祭）として、神社で行われる大祭の一つとして執り行われている。

当社の春季大祭は、五月十日・十一日の両日に執行していたが、昭和四十二年に氏子の農家の方々から、苗代の籾蒔き時期に重なるため、祭日の変更要望が出され、五月二十・二十一に変更した。また、更に昭和四十五年氏子から休日である土・日曜日の執行の要望があり、現在の五月第三日曜日に変更した。

この祭典では、特殊神事として「※供膳祭」が総代、幹事により奉仕される。

供膳祭

春・秋の大祭に神饌（お供え物）を献饌（お供え物を神に供えること）する儀式が一般の神社とは異なり、特殊な神饌を特殊な形態で神前にお供えするため、特に「供膳祭」と呼んでいる。

供膳祭は当社の勧請もとの神社である吉備津神社において、毎年春と秋の大祭に執り行われる「七十五膳据の神事」と非常によく似た形態である。

吉備津神社の「七十五膳据の神事」は、長い回廊の端にある御供殿において、七十五の神膳（お供え物）を調理する。それぞれの神膳には、必ず「御盛相」と呼ばれる飯が中心に置かれ、魚、昆布、野菜等に柳の箸が副えられる。

御盛相は春祭には白米、秋祭には玄米を使用して作られる。

祭りが始まると、御供殿から本殿まで百数十人の奉仕者が長い行列をつくり、順番に七十五の神膳を本殿内にお供えする。

当社においては、供膳所（お釜殿）で十九の神膳を調理する。

お供え物は、供膳所内にある釜で二時間程蒸した四升の白米を、円筒形の竹型に適量入れ、押し寿司の要領で押し抜いて作る「御盛相」が中心となる。

神膳は本膳（朱塗りの長方形の膳）が三台、朱塗りの大三方が十六台、合わせて十九台と通常の神饌が十一台の合計三十台である。

本膳には御盛相が杉の板敷きにのせられ中央に置かれる。その右に「盛り込み」という「おかず」が置かれる。「盛り込み」は素焼きの皿の上に昆布を敷き、五種類の季節の生野菜（大根、人参、茄子、蓮根、芋）を適宜の大きさに切りのせたもの。また、御盛相の左には鯛を一尾置き、箸が一膳副えられる。

朱塗りの大三方には御盛相、小餅二ヶ、小鯛、果物がそれぞれ盛りつけられる。

祭りが始まると御身衣を着用した総代、幹事四十二名が、本殿まで長い行列をつくり、手渡しにより神膳を本殿内にお供えする。

この「供膳祭」は通常の祭りでは献饌に相当するもので、神様に祭りの主旨を告げる祝詞奏上の前に神様に季節の様々な食物をお供えをする儀式であり、吉備津神社や当社ではその儀式が祭りの中枢を担っている。

このような形態の祭りは県内でも例が少なく全国的にもごく限られた神社に継承されているに過ぎず、その意味でも当社の「供膳祭」は貴重な伝統行事と言える。

本膳

本殿に供えられた神饌

御盛相の米を蒸す釜

供膳祭を奉仕する総代、幹事

飯と粥

古来から神様へお供えする最も重要な神饌は米であり、そのお供え方法は大別して二種類の方法がある。一つは生饌といい、生の米（稲穂・玄米・白米・洗米）をお供えする。もう一つは熟饌といい、米を蒸したり炊いたりして人の手を加え調理したものをお供えする。又、米を蒸したものを飯といい、水と共に炊いたものを粥という。

現在私達が食べている「ごはん」は粥であり、水分を少なくして固粥として食べているのである。古来の日本人は粥ではなく飯を食べていたといわれている。その原型を古式のまにまに「御盛相」という形で当社に残され伝えられている。

夏祭

当社では、「夏越祭」又は「輪くぐり祭」とも呼んでおり、蘇民将来伝説に基づき、輪くぐり神事と人形の神事も同時に行われる。

夏祭当日の早朝に茅を刈って、綺麗なものだけをより分けて境内に大きな輪が作られ、その輪を左、右、左と三回潜り参拝する。

また、用意した茅で小さな輪を作り、家庭の玄関に掛ける事によって、疫病や災いを免れる事ができるとされている。

夏越祭では、予め配布された人形（人の身体に代えるもの）を撫で、息を吹きかけ神前に供える事によって体につく病魔、怪我、心の病などを祓って元気に夏が過ごせるよう無病息災を祈願する。

茅の輪を潜る参拝者

蘇民将来伝説

備後風土記逸文に次のような事柄が記されている。

素盞嗚尊が南海の旅をしていた途中、一夜の宿をある兄弟に頼みました。

裕福な弟の巨旦将来はあっさり断りましたが、貧乏だが心の優しい兄の蘇民将来は素盞嗚尊を快く迎え入れました。

蘇民将来一家の温かいもてなしを大変喜んだ素盞嗚尊は、「疫病が流行れば、茅の輪を作って門に懸けよ」と言い残して旅立ちました。

その後、疫病が大いに流行り、茅の輪を門に懸けた蘇民将来一家は無事助かり、巨旦将来一家は滅んでしまいました。

秋季大祭

神社の最も重要な祭りである例祭として行われる場合が多い。

当社では、春祭りと共に、神社の最も重要な例祭の一つとして行われている。春祭りがその年の穀物の豊作を祈念する祭りに対し、秋祭りは収穫の終わりに際して神の恩恵に感謝し、更に次の年の豊作を祈願して行われる。

祭礼日は、十月十日・十一日であったが、大正十一年に十月二十日・二十一日の両日に変更